

山陰地方における中学校教員のダンス教育に対する意識と指導状況について —— 学習内容の拡大にむけて ——

島根大学教育学部 廣 兼 志 保
鳥取大学教育学部 佐 分 利 育 代

Teacher's Consciousness and Practical Conditions of Dance Education
: The case of Junior High School in the Sanin District

Shiho HIROKANE

Ikuyo SABURI

キーワード：ダンス教育，学習内容の拡大，教材開発

はじめに

戦後、学校におけるダンス教育は、フォークダンスや民踊といった伝統的な決まった型を覚えて踊る教材と、表現運動や創作ダンスといった決まった型がなく自由に創作して踊る教材との二本柱によってすすめられてきた。

一方、現代社会においては、上記の他、社交ダンスのような社交を目的とした踊り・エアロビックダンスやジャズダンスのようなリズムにのって動くことを目的とした踊り・クラシックバレエやモダンダンスや日本舞踊のようなイメージを動きによって表現することを目的とした踊りなど様々なタイプの舞踊が、ひろく人々に楽しまれている。このように、舞踊には目的や動きのタイプの異なる様々なジャンルがあるため、それぞれの特性によって人々の多様なニーズに応えることができるといえる。

上記のような舞踊をとりまく社会状況をうけて、近年、ダンス教育の領域においても、「多様化する運動欲求に応える多様な学習内容を」との考え方をもとに学習内容の拡大がはかられ、フォークダンス・民踊・創作ダンスといった従来の学習内容に加え「その他のダンス」として、ジャズダンスや社交ダンスなど多様なタイプの舞踊を学習内容に取り入れることができるようになった。また、中学・高校においてはダンスの男女共習も、徐々にすすめられている¹⁾。

このように、新しいダンス教育の理念として「学習内容の拡大」と「学習者層の拡大」とが提唱され、具体的な方策として「その他のダンス」の導入と男女共習とが現在すすめられているが、従来のダンス教育は、学習内容としてはフォークダンスや創作ダンスを、また、学習者層としては女子を中心としてすすめられていたため、この新しい理念にふさわしい学習方法や指導方法——特に男性教員による男子生徒のためのダンス指導法についてなど——は、まだ研究実績も少なく、現在のところ開発途上にあるといえる。どんな教材をどんな方法で学校教育のなかに取り入れていくべきかといった指針もまだ確立されておらず教材研究や指導法の研究もこれから積み上げていかなければならないといった現状にある。

そこで、ダンス教育の現状と課題を把握するため、日本教育大学協会全国保健体育・保健部門に属する全国舞踊研究会では、現職教員男女に対する全国規模の意識調査をおこなった。

またこの意識調査をもとに、全国の中学校教員を対象とした研究「ダンス指導実践に関わる現職教員の意識——中学校を対象に——」²⁾において、中学校教員のダンス指導の全国的な現状を明らかにした。

本研究では、上記の意識調査で得られたデータから山陰両県相当分のデータを抽出し、使用している。また本研究に先立ち、山陰両県の中学校教員のダンス指導実践に関わる意識の実態についてみたところ、全般的には全国調査とほぼ同じ現状を示していることがわかったので、今回は、単なる全般的な傾向の比較研究ではなく、以下に述べるような問題に焦点を絞っての研究をすすめることとした。

研究目的

本研究は、「はじめに」で示した「ダンス教育における学習内容と学習者層の拡大」という新しい教育理念を考察の軸にすえて、山陰両県の中学校でのダンス学習指導の現状を把握するとともに、現職教員のダンス教育に関する意識を探るものである。そのなかでも、今回は「学習内容の拡大にあたって、現職の教員はどんな種類のダンスを新たに学校教育の中に取り入れたいと望んでいるのか」という問題に焦点をあてて考察していく。具体的には、以下の事柄について現職教員の意識と現状を明らかにする。

- ① ダンスの教育的価値として、何を期待しているのか
- ② どんな種類のダンスを生徒に学ばせたいと考え、実際に指導しているのか
- ③ ダンスの「踊る・創る・観る」という活動のうち、どんな活動を好んで（嫌って）いるのか
- ④ 教員自身どんなダンスを踊ることができるのか

中でも、今後どのようなダンス教材を開発していくべきかについて教員の立場からの示唆を得るため、①②③については詳しく考察していくこととする。

さらに、得られた結果をもとに、教員の意識が、「学習教材の選定」という状況にあたってどのようなようにたらくのかについても考えてみたい。

研究方法

対 象 鳥取県および島根県の公立中学校における保健体育科担当教員

調査期間 1991年8月～10月

調査方法 質問紙調査。対象を無作為に抽出し、調査用紙を郵送により配布・回収。

配布数 鳥取=118, 島根=69

回収数 鳥取=63, 島根=43

回収率 鳥取=54.4%, 島根=62.3%

調査内容

以下の項目について調査をおこなった。

- ・回答者の属性
- ・ダンスの教育的価値に関する意識
- ・生徒に学ばせたいダンスの種類
- ・指導しているダンスの種類と実施状況
- ・参加形態からみたダンスに対する好嫌
- ・踊れるダンスの種類

調査用紙は松本らによる先行研究「ダンス指導の現状と課題～全国小学校・中学校・高校現職教員への意識調査から～」³⁾において作成されたものを使用した。

分析方法

奈良教育大学・筑波大学及び鳥取大学の大型計算機SPSSによって統計処理した。

結果と考察

回答者の属性については表1のようであった。

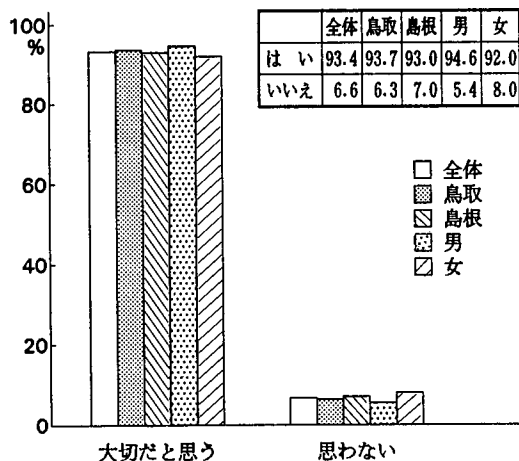
表1 回答者の属性

単位=人(%)

		鳥 取	鳥 根	全 体			
有効回答数		63 (100.0)	43 (100.0)	106 (100.0)			
		(59.4)	(40.6)	(100.0)			
性 別	男	32 (50.8)	24 (55.8)	56 (52.8)			
	女	31 (49.2)	19 (44.2)	50 (47.2)			
					男	女	
年 齢	20 代	18 (28.6)	10 (23.3)	28 (26.4)	10	18	
	30 代	32 (50.8)	14 (32.6)	46 (43.4)	30	16	
	40 代	8 (12.7)	12 (27.9)	20 (18.9)	13	7	
	50 代	5 (7.9)	7 (16.3)	12 (11.3)	3	9	
					合計	56	50
教職経験年数							
	0 ~ 4 年	13 (20.6)	10 (23.3)	23 (21.7)	8	15	
	5 ~ 9 年	20 (31.7)	5 (11.6)	25 (23.6)	14	11	
	10 ~ 14 年	13 (20.6)	5 (11.6)	18 (17.0)	15	3	
	15 ~ 19 年	7 (11.1)	9 (20.9)	16 (15.1)	10	6	
	20 ~ 24 年	5 (7.9)	4 (9.3)	9 (8.5)	5	4	
	25 ~ 30 年	1 (1.6)	5 (11.6)	6 (5.7)	2	4	
	30 年 以上	3 (4.8)	5 (11.6)	8 (7.5)	2	6	
	無 回 答	1 (1.6)	0	1 (0.9)	0	1	
専門実技							
	ダンス	7 (11.1)	3 (7.0)	10 (9.4)	1	9	
	体操	2 (3.2)	1 (2.3)	3 (2.8)	1	2	
	機械運動	2 (3.2)	5 (11.6)	7 (6.6)	3	4	
	陸上競技	15 (23.8)	9 (20.9)	24 (22.6)	16	8	
	球 技	24 (31.1)	18 (41.9)	42 (39.6)	26	16	
	武 道	3 (4.8)	4 (9.3)	7 (6.6)	5	2	
	水泳・スキー	2 (3.2)	3 (7.0)	5 (4.7)	3	2	
	そ の 他	2 (3.8)	0	2 (1.9)	1	1	
	無 回 答			6 (5.6)			

1. ダンスの教育的価値として、何を期待しているのか

(1) ダンスの経験は生徒にとって大切だと思うか



グラフ1 ダンスの経験は生徒にとって大切だと思うか

グラフ1は、ダンスの経験は生徒にとって大切だと思うかどうかについてたずねた結果を県別・性別で比較したものである。なお、グラフの項目は「山陰全体」「鳥取」「島根」「男」「女」に分類した。この分類は他のグラフ・表についても同様である。結果をみると、殆どの教員がダンスの経験は生徒にとって大切だと思うと答えている。この傾向については、地域差・性差はなかった。

(2) ダンスの経験は生徒にとって大切だと思う理由

これらの「ダンスの経験が生徒にとって大切だと思う理由」とは、各回答者の考える「ダンスの学習経験を通して生徒に身につけてほしい事柄」を反映しているといえる。したがって、同時に、これらの理由は、ダンスに期待する教育的効果を表しているとも解釈できよう。

この結果から、山陰地方の中学校教員が、ダンスに対して主にどんな教育的効果を期待しているかがわかる。全体としては、「感情を豊かにする」「リズムによって体力づくりができる」「想像性・創造性豊かな人間を育てる」の3つが上位にあげられているが、県別・性別にみると、大切だと思う理由の順位に若干違いがみられる。

表2a ダンスの経験が生徒にとって大切だと思う理由 (全体) 単位=%

① 感情を豊かにする	18.6
② リズムによって体力づくりができる	15.2
③ 想像性・創造性豊かな人間を育てる	11.1
④ 仲間との共感の時間がもてる	10.1
⑤ 表現・伝達の喜びを体験できる	10.1
⑥ 律動感を養う	6.1
⑦ 開放的で自由な時間を持てる	5.1
⑧ 身体を知覚できる	3.0
⑨ 日本や外国の文化・伝統の理解が深まる	2.0

有効回答数 99

表2b ダンスの経験が生徒にとって大切だと思う理由 (鳥取) 単位=%

① 感情を豊かにする	18.6
② リズムによって体力づくりができる	13.6
③ 表現・伝達の喜びを体験できる	11.9
④ 想像性・創造性豊かな人間を育てる	10.2
⑤ 律動感を養う	5.1
⑥ 身体を知覚できる	5.1
⑦ 仲間との共感の時間がもてる	5.1
⑧ 日本や外国の文化・伝統の理解が深まる	3.4
⑨ 開放的で自由な時間を持てる	3.4

有効回答数 59

表2c ダンスの経験が生徒にとって大切だと思う理由 (島根) 単位=%

① 開放的で自由な時間を持てる	25.0
② 仲間との共感の時間がもてる	17.5
③ リズムによって体力づくりができる	17.5
④ 想像性・創造性豊かな人間を育てる	12.5
⑤ 感情を豊かにする	12.5
⑥ 表現・伝達の喜びを体験できる	7.5
⑦ 律動感を養う	7.5
⑧ 日本や外国の文化・伝統の理解が深まる	0
⑨ 身体を知覚できる	0

有効回答数 40

表2d ダンスの経験が生徒にとって大切だと思う理由 (男) 単位=%

① リズムによって体力づくりができる	22.6
② 感情を豊かにする	17.0
③ 仲間との共感の時間がもてる	15.1
④ 律動感を養う	9.4
⑤ 表現・伝達の喜びを体験できる	9.4
⑥ 想像性・創造性豊かな人間を育てる	9.4
⑦ 日本や外国の文化・伝統の理解が深まる	1.9
⑧ 開放的で自由な時間を持てる	1.9
⑨ 身体を知覚できる	0

有効回答数 53

表2e ダンスの経験が生徒にとって大切だと思う理由 (女) 単位=%

① 感情を豊かにする	15.2
② 想像性・創造性豊かな人間を育てる	13.0
③ 表現・伝達の喜びを体験できる	10.9
④ 開放的で自由な時間を持てる	8.7
⑤ リズムによって体力づくりができる	6.5
⑥ 身体を知覚できる	6.5
⑦ 仲間との共感の時間がもてる	4.3
⑧ 律動感を養う	2.2
⑨ 日本や外国の文化・伝統の理解が深まる	2.2

有効回答数 46

すなわち、鳥取では「感情を豊かにする」「リズムにのって体力づくりができる」「表現・伝達の喜びを体験できる」が上位にあげられているのに対して、鳥根では「開放的で自由な時間を持てる」「仲間との共感の時間がもてる」「リズムにのって体力づくりができる」が上位にあげられている。

また、男性は「リズムにのって体力づくりができる」「感情を豊かにする」「仲間との共感の時間がもてる」を上位にあげているのに対して、女性は「感情を豊かにする」「想像性・創造性豊かな人間を育てる」「表現・伝達の喜びを体験できる」を上位にあげている。

このように、若干の違いはみられるものの、各群が上位にあげた項目は、共通するものも多い。そこで各表の上位3項目を拾いあげてみた。各表の上位3位にあげられている項目は、以下の6つである。

- 「感情を豊かにする」
- 「想像性・創造性豊かな人間を育てる」
- 「リズムにのって体力づくりができる」
- 「開放的で自由な時間をもてる」
- 「仲間との共感の時間がもてる」
- 「表現・伝達の喜びを体験できる」

これらをまとめてみると、「感情を豊かにする」「想像性・創造性豊かな人間を育てる」「開放的で自由な時間を持てる」は個人の内面に関する情意面での教育的効果であるといえ、「リズムにのって体力づくりができる」は身体面での教育的効果であり、「仲間との共感の時間がもてる」「表現・伝達の喜びを体験できる」はコミュニケーションに関する情意面での教育的効果であるといえる。

つまり、山陰地方の中学校教員は、ダンス学習に対して

- ① 身体・情意両面における教育的効果を期待している
- ② 身体面においては、特に「リズムにのっての体力づくり」を期待している
- ③ 情意面においては、個人の内面を豊かに育て、自分を開放し、仲間との良好なコミュニケーションがはかれるようになることを期待している

ということがわかった。

一方、三浦・村田の研究によれば、学習者の欲求充足とダンスの様式とは、図のような関係で対応しているという⁴⁾。

この図1に示した対応関係を手がかりに、表2a~eの「理由」が示唆するダンスの教育的価値と、それを充足させるダンスとを対応させると、以下ようになる。

創作型ダンスとは、イメージを自由に表現し踊って楽しむダンスであり、創作ダンス・モダンダンス・舞踏(ブト)などがこれにあたる。また、これらのダンスの主たる特性を生かした学習によって期待される

図1 欲求充足と様式によるダンスの分類と特性

欲求様式	イメージ	リズム
非定形	倉リイ巨型 イメージを自由に表現し踊って楽しむ 創作ダンス モダンダンス 舞踏	リズム型 リズムにのって自由に踊って楽しむ ジャズダンス ディスコダンス ブレイクダンス エアロビクスダンス
	リズムカルな動きの連続による模倣 変身欲求の充足	
定形	バレエ 各種民族舞踊 型を伝承しイメージへの変身を楽しむ 民族舞踊型	社交ダンス 各国フォークダンス スクエアダンス 型を共有し、リズムを通じてのコミュニケーションを楽しむ 社交型

教育的効果としては、「感情を豊かにする」「想像性・創造性豊かな人間を育てる」「表現・伝達の喜びを体験できる」「身体を知覚できる」「開放的で自由な時間を持てる」「仲間との共感の時間がもてる」が考えられる。

リズム型ダンスとは、リズムによって自由に踊って楽しむダンスであり、ジャズダンス・ディスコダンス・ブレイクダンス・エアロビックダンスなどがこれにあたる。また、これらのダンスの主たる特性を生かした学習によって期待される教育的効果としては、「リズムによって体力づくり」「律動感を養う」「開放的で自由な時間を持てる」「身体を知覚できる」が考えられる。

民族舞踊型ダンスとは、型を伝承しイメージへの変身を楽しむダンスであり、バレエ・日本舞踊などの各種民族舞踊などがこれにあたる。また、これらのダンスの主たる特性を生かした学習によって期待される教育的効果としては、「感情を豊かにする」「表現・伝達の喜びを体験できる」「開放的で自由な時間を持てる」「身体を知覚できる」「日本や外国の文化・伝統の理解が深まる」が考えられる。

社交型ダンスとは、型を共有し、リズムを通じてのコミュニケーションを楽しむダンスであり、社交ダンス・各国フォークダンス・スクエアダンスなどがこれにあたる。また、これらのダンスの主たる特性を生かした学習によって期待される教育的効果としては、「開放的で自由な時間を持てる」「身体を知覚できる」「仲間との共感ももてる」「日本や外国の文化・伝統の理解が深まる」が考えられる。

ところで、前述のように、ダンスが生徒にとって大切だと思われる主な理由には、以下の6つがある。すなわち、「感情を豊かにする」「想像性・創造性豊かな人間を育てる」「リズムによって体力づくりができる」「開放的で自由な時間を持てる」「仲間との共感の時間がもてる」「表現・伝達の喜びを体験できる」である。上述のことから、これらの項目を充足するための特性をもったダンス教材として、以下のものが考えられる。

*「感情を豊かにする」+「想像性・創造性豊かな人間を育てる」+「仲間との共感の時間がもてる」+「表現・伝達の喜びを体験できる」+「開放的で自由な時間を持てる」=創作ダンス

*「リズムによって体力づくりができる」+「開放的で自由な時間を持てる」=エアロビックダンス・ジャズダンス

*「開放的で自由な時間を持てる」+「仲間との共感の時間がもてる」=フォークダンス・社交ダンス
したがって、山陰地方の中学校教員がダンス学習に期待する主な教育的効果を実現させるにふさわしい教材は、創作ダンス・エアロビックダンス・ジャズダンス・フォークダンス・社交ダンスだといえる。

2. どんな種類のダンスを生徒に学ばせたいと考え、実際に指導しているのか

(1) 生徒にさせたいダンスの種類

表3 生徒にさせたいダンスの種類(複数回答可)

単位=人(%)順位

	全体	鳥取	島根	男	女
フォークダンス	42(39.6)3位	21(33.3)4位	21(48.8)2位	24(42.9)1位	18(36.0)4位
民俗舞踊	9(8.5)5位	7(11.1)5位	2(4.7)5位	2(3.6)5位	7(14.0)5位
日本舞踊	2(1.9)7位	1(1.6)7位	1(2.3)6位	0	2(4.0)6位
ジャズダンス	33(31.1)4位	25(39.7)3位	8(18.6)4位	14(25.0)4位	19(38.0)3位
エアロビックダンス	47(44.3)2位	30(47.6)2位	17(39.5)3位	21(37.5)2位	26(52.0)2位
クラシックバレエ	3(2.8)6位	3(4.8)6位	0	1(2.0)6位	2(4.0)6位
創作ダンス	57(53.8)1位	33(52.4)1位	24(55.8)1位	21(37.5)2位	36(72.0)1位
社交ダンス	2(1.9)7位	1(1.6)7位	1(2.3)6位	0	2(4.0)6位
その他	71(67.0)	63(100.0)	8(18.6)	38(67.9)	33(66.0)
有効回答数	106	63	43	56	50

表3をみると、各群によって若干違いはあるものの順位はほぼ一致することがわかる。各群の上位3位を占めているのは、以下の4種類、すなわち、創作ダンス・エアロビックダンス・ジャズダンス・フォークダンスである。これらは、ダンス学習に期待する主な教育的効果を実現させる教材という観点から選ばれた前述のダンスとはほぼ一致する。

このことから、少なくとも本調査の対象者においては、生徒にさせたいダンスを選択するときに、自らの求める教育的価値にそってそのダンスを選ぶ傾向があるのではないかと予測することができる。

(2) 実際に指導しているダンスの種類

表4 指導しているダンスの種類(複数回答可)

	単位=人(%)順位				
	全体	鳥取	島根	男	女
フォークダンス	69(65.1)1位	47(74.6)1位	22(51.2)1位	35(62.5)1位	34(68.0)1位
民俗舞踊	5(4.7)5位	4(6.3)5位	1(2.3)4位	1(1.8)3位	4(8.0)5位
日本舞踊	2(1.9)6位	1(1.6)6位	1(2.3)4位	1(1.8)3位	1(2.0)7位
ジャズダンス	6(5.7)4位	5(7.9)4位	1(2.3)4位	1(1.8)3位	5(10.0)4位
エアロビックダンス	9(8.5)3位	6(9.5)3位	3(7.0)3位	1(1.8)3位	8(16.0)3位
クラシックバレエ	0 8位	0 8位	0 8位	0 7位	0 8位
創作ダンス	42(39.6)2位	24(38.1)2位	18(41.9)2位	12(21.4)2位	30(60.0)2位
社交ダンス	2(1.9)6位	1(1.6)6位	1(2.3)4位	0 7位	2(4.0)6位
その他	80(75.5)	63(100.0)	17(39.5)	44(78.4)	36(72.0)
有効回答数	106	63	43	56	50

フォークダンスと創作ダンスが多く指導されていることがわかる。

フォークダンスは、地域差・性差に関わらず、どの群においても半数以上が指導している。

一方、創作ダンスについてみると、男性群の指導実施率は21.4%であり、フォークダンスに次いで2位であるが、女性群の60.0%に比べると一見してかなり低い。

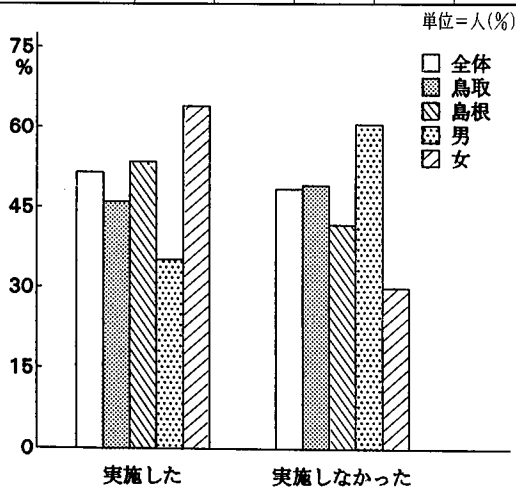
全体的な状況としては地域差は殆どないが、性差をみると、男性群ではフォークダンスが指導の中心になっているのに比べて、女性群では多くの種類のダンスを指導していることがわかった。

(3) 過去1年間に創作ダンスの授業を実施したか

全体の傾向をみると、「実施した」51.5%「実施しなかった」48.5%であり、約半数が実施している。これは、全国調査のデータ(58.6%が実施)と比べるとやや低いものの、傾向はほぼ同じである。県別にみると、島根が鳥取よりも7.5%ほど実施率が高いものの、あまり差はない。

性別からみると、「実施している」のは、女性64.0%、男性35.1%であり、男性は実施率が低いことが目立つ。しかし、一方で、表3の「生徒にさせたいダンスの種類」では、男性の多くが創作ダンスを選んでおり、また表4の「指導しているダンスの種類」でも、実数としては少ないものの割合としては多くの男性が創作ダンスを指導しているという状況もある。この性差の原因については今回は特定できないが、男性

	全体	鳥取	島根	男	女
実施した	52(51.5)	29(46.0)	23(53.5)	20(35.1)	32(64.0)
実施しなかった	49(48.5)	31(49.2)	18(41.9)	34(60.7)	15(30.0)
無回答	5	3	2	2	3



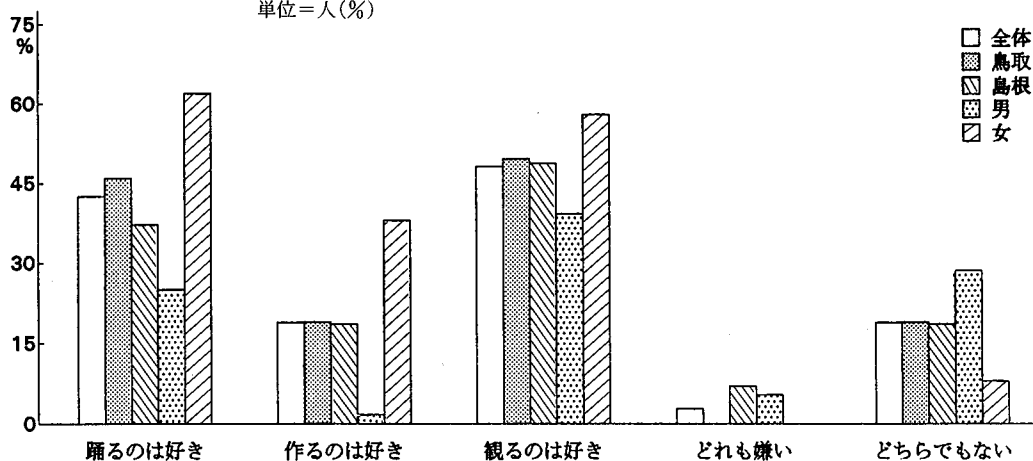
グラフ2 過去1年間に創作ダンスの授業を実施したか

教員が男子生徒を担当する場合にはダンス自体を指導していないという状況も考えられるので、指導をとりまく環境にも一因があるのではないかと予想できる。

(4) ダンスの「踊る・創る・観る」の活動のうち、どんな活動を好んで(嫌)っているのか

	全体	鳥取	鳥根	男	女
踊ることは好き	45(42.5)	29(46.0)	16(37.2)	14(25.0)	31(62.0)
創ることは好き	20(18.9)	12(19.0)	8(18.6)	1(1.8)	19(38.0)
観ることは好き	51(48.1)	30(49.6)	21(48.8)	22(39.3)	29(58.0)
どれも嫌い	3(2.8)	0(0)	3(7.0)	3(5.4)	0(0)
どちらともいえない	20(18.9)	12(19.0)	8(18.6)	16(28.6)	4(8.0)
有効回答数	106	63	43	56	50

単位=人(%)



グラフ3 ダンスに対する好嫌度(複数回答可)

一般に、ダンス活動への参加形態には「踊る・創る・観る」の3つがあるといわれるが、これはその形態別にダンス全般に対する好嫌をみたものである。何らかの参加形態が「好き」という回答が上位を占めており「どれも嫌い」という回答は殆どない。次に「踊る・創る・観る」の形態別に好嫌をみると、全体の傾向としては「観る」と「踊る」活動が好まれ、「創る」活動はあまり好まれていないことがわかる。これらの傾向には地域差は殆どないが、性差をみると、男性は女性に比べて「踊る」「創る」という能動的な活動を好まないことがわかる。特に「創る」のが好きな男性は1名しかおらず、どちらかといえばダンスに対して受動的な態度であるといえる。このことは、「男性は創作ダンスをあまり指導していない」という実態とも一致している。「自らの好まない活動は指導しない」という傾向があるとも考えられる。

しかし一方で、男性には、今後「好き」にも「嫌い」にも変わり得る「どちらともいえない」が28.6%と多いこともわかった。

(5) 教員自身どんなダンスを踊ることができるのか

表5より、フォークダンスと創作ダンスが上位だとわかる。これらの順位の傾向は、「指導しているダンスの種類」における傾向とはほぼ一致している。このことから、「教員自身が踊れるダンスを指導する」という傾向がうかがえる。

表5 自分が踊れるダンスの種類(複数回答可)

	単位=人(%)順位				
	全体	鳥取	島根	男	女
フォークダンス	79(74.5)1位	52(82.5)1位	27(62.8)1位	36(64.3)1位	43(86.0)1位
民俗舞踊	9(8.5)5位	8(12.7)5位	1(2.3)7位	1(1.8)5位	8(16.0)5位
日本舞踊	4(3.8)7位	4(6.3)7位	0	0	4(8.0)7位
ジャズダンス	16(15.1)4位	14(22.2)3位	2(4.7)5位	4(7.1)2位	12(24.0)4位
エアロビックダンス	20(18.9)3位	11(17.5)4位	9(20.9)3位	2(3.6)4位	18(36.0)3位
クラシックバレエ	2(1.9)8位	0	2(4.7)5位	0	2(4.0)8位
創作ダンス	33(31.1)2位	21(33.3)2位	12(27.9)2位	4(7.1)2位	29(58.0)2位
社交ダンス	8(7.5)6位	5(7.9)6位	3(7.0)4位	1(1.8)5位	7(14.0)6位
その他	77(72.6)	63(100.0)	14(32.6)	14(32.6)	34(68.0)
有効回答数	106	63	43	56	50

結 論

1. ダンス学習に期待する教育的効果について

本研究の結果から、山陰地方の殆どの中学校教員が、ダンスの経験は生徒にとって大切なものであると考えていることがわかった。また、どういう点で大切だと考えているかについては、群によって若干の違いがあるものの、身体・情意両面における教育的効果を期待しており、身体面においては、特に「リズムにのっての体力づくり」を、また、情意面においては、個人の内面を豊かに育て、自分を開放し、仲間との良好なコミュニケーションがはかれるようになることを期待しているということがわかった。

2. 生徒に学ばせたいダンスの種類と実際に指導している教材について

実際に指導しているダンス教材は、フォークダンスと創作ダンスが多かった。これは、従来のダンス教育における中心的な教材であり、山陰の中学校教員が現在ダンスに期待している教育的効果のうち、特に情意面の育成にふさわしい教材であるともいえる。また、生徒にさせたいダンスとしてもこの2つは上位にあげられており、今後ともダンス教育の中心的教材になっていくであろうと考えられる。

この2つの教材に次いで多く指導されているのは、エアロビックダンスとジャズダンスである。これは山陰の中学校教員が現在ダンスに期待している教育的効果のうち、特に身体面の育成にふさわしい教材であるといえる。また、生徒にさせたいダンスとしても上位にあげられていることから、今後はダンス教育の中心的教材の中に加えられていくであろうと思われる。

3. 参加形態からみたダンスに対する好嫌と「踊れる」ダンスについて

山陰地方の中学校教員は、ダンス全般に対して、「踊る・創る・観る」のうち何らかの参加活動を好んでいることがわかった。これらの結果には地域差は殆どない。参加形態別にみると「観る」活動が性差も比較的少なく、3つの形態の中では最も好まれていた。ところが、「踊る」「創る」活動は非常に性差が大きく、女性はこれらの能動的な活動を好むが、男性は好まないということがわかった。

また、教員自身が踊れるダンスの上位にあげられているのはフォークダンス・創作ダンス・エアロビックダンス・ジャズダンスであり、この傾向には、地域差・性差は殆どなかった。

4. 学習教材選定と教員自身のダンスに関する教育観・好嫌・踊れる種類との関わりについて

〈結果と考察〉から、ダンス学習指導の実施にあたっては、以下の①～③に示す傾向がみられた。

- ① 「教育観」=教員自身が重視する教育的価値を充足するダンスを教える
- ② 「ダンスの好嫌」=教員自身が好まない活動を含むダンスは教えない
- ③ 「実技能力」=教員自身が踊れるダンスを教える

このことから、「この3つの要因によってどんなダンスを指導するかが決定されるのではないか」という仮説が導き出されよう。この仮説の検証は、今後の研究課題としたい。

以上、山陰地方の中学校教員のダンス教育に関する意識と指導状況についてみてきたが、これらの結果を「学習内容の拡大」という視点からまとめてみたい。

まず、今回の調査の特徴としてあげられるのは、従来ダンス学習の中心的内容であったフォークダンスと創作ダンスに加えて、エアロビックダンスやジャズダンスにも教員の興味・関心が向けられていることである。エアロビックダンスとジャズダンスは、今回調査した「ダンス学習に期待する教育的効果とそれを充足させるダンス」「生徒に学ばせたいダンス」「実際に指導しているダンス」「教員自身が踊れるダンス」のいずれの項目においても共通して上位にあげられていた。

このことと、今回の調査で「教員自身が重視する教育的価値を充足するダンスを教える」「教員自身が好まない活動を含むダンスは教えない」「教員自身が踊れるダンスを教える」という傾向がみられたことを考え併せると、エアロビックダンスとジャズダンスは、望ましい学習内容として今後も指導されていくであろうと予測できる。

したがって、今後中学校におけるダンス教育の学習内容を拡大し定着させようとするならば、エアロビックダンスやジャズダンスの教材を取り入れるのが有効であろうと思われる。しかし、現在のところわが国では中学生のためのエアロビックダンスやジャズダンスに関する教材研究や授業研究はまだ少ないので今後は、生徒の心身の発育・発達や教育的効果を考慮したエアロビックダンスやジャズダンスの教材研究や授業研究を積み上げていく必要がある。

今回の研究で、明らかになった事柄をふまえ、学習内容の拡大にむけて今後のダンス学習を展開しようとするならば、まず教員養成の段階で、フォークダンス・創作ダンス・エアロビックダンス・ジャズダンスを含む多様なダンスを学ぶこと、そしてそれらが各々に内包している教育的価値を理解させることが必要になると考えられる。

特に、今まで教材研究や授業研究が少なかったフォークダンス・創作ダンス以外のダンスについては、教材研究や授業研究を積み上げ、生徒の心身の発育・発達や教育的効果を考慮した学習内容と方法を開発していかなくてはならない。

学習者層の拡大——具体的には男女共習の推進——に関わる課題についても考えてみたい。本研究では「教員はどんなダンス活動を好んでいるか」について、「踊る」「創る」という能動的な活動を好む男性が少ないという現状が指摘されているが、同時にこの2つの活動については、今後「好き」にも「嫌い」にも変わり得る「どちらでもない」と回答した男性が比較的多いことも指摘されている。この「どちらでもない」と回答した男性がより「好き」に変化するならば、男性教員によるダンス指導をより充実させる基盤が得られるであろう。

これらのことにより、ダンス教育は、新しい内容と方法へ向かって拡大していく可能性が得られよう。

本研究では、教員の立場から教材選定について考察したが、生徒の立場からの考察も必要であると思われる。今後の研究課題としたい。

また、今後は、上記の事柄を考慮しつつ、多様な学習内容・方法・対象を取り込んで新しい方向へと拡大していくための、ダンス教育の内容と方法について、研究と開発に取り組みたいと考える。

最後になりましたが、本研究をすすめるにあたり貴重なご協力をいただいた山陰両県の先生方をはじめ

データの分析に力を貸してくださった先生方に、厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献一覧

- 1) 舞踊教育研究会編『舞踊学講義』初版. 大修館書店. 1991. pp. 122-131.
- 2) 佐分利育代・廣兼志保「ダンス指導実践に関わる現職教員の意識——中学校を対象として——」『鳥取大学教育学部研究報告教育科学』第36巻第2号. 1994. pp. 309-329.
- 3) 松本富子・高橋和子・茅野理子・細川江利子・佐分利育代・廣兼志保・畑野裕子「ダンス指導の現状と課題～全国小学校・中学校・高校現職教員への意識調査から～」『大学専門教育改善のための現職教員のダンス指導実践に関する調査研究』全国舞踊研究会. 1994. pp. 1-18.
- 4) 三浦弓杖・村田芳子「生涯学習時代における舞踊教育の再検討」『アジア国際舞踊会議発表論文集』. 1993. p. 91.
- 5) 佐分利育代・廣兼志保・中村久子「ダンス指導実践に関わる現職教員の意識——中学校を対象として——」日本体育学会第43回大会. 1992.
- 6) 松本富子・高橋和子・茅野理子・細川江利子・佐分利育代・廣兼志保・畑野裕子「現職教員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討——大学時履修経験が与える影響について——」『舞踊学』第16号. 舞踊学会. 1994. pp. 12-23.
- 7) 湊英之「発達段階に応じた効果的な創作ダンス指導——個を生かす学習指導法——」『ダンスの教育学』第6巻. 初版. 徳間書店. 1992. pp. 126-132.
- 8) 文部省『中学校指導書 保健体育編』初版. 1989. pp. 50-53, 58-65.
- 9) 片岡康子「生涯スポーツ時代へ向けてのダンス教育」『学校体育』第43巻第3号. 1990. pp. 14-16.
- 10) 三浦弓杖『『スポーツの主人公』をめざすダンスのカリキュラムと授業の考え方』『学校体育』第44巻第11号. 1991. pp. 14-16.
- 11) 川口千代『『スポーツの主人公』をめざすダンス——これからのダンス教育の課題——』『学校体育』第44巻第11号. 1991. pp. 10-13.